

第26回院内学術研究発表会

平成26年 1月23・31日

1. 長期の経過で再発した基底細胞癌の1例

形成外科

木谷慶太郎 最所 裕司

前場 崇宏

症例は60代男性。26年前、左頬部基底細胞癌にて当院で腫瘍切除・局所皮弁手術を施行した。その後、局所再発なく follow 終了としていたが、20年前（手術から6年後）に再発し、腫瘍切除・植皮術を施行した。2回目の手術後約4年間 follow したが、自己判断で受診を終了していた。本年2月（2回目の手術から21年後）、左頬部の潰瘍性病変を主訴に受診し、生検にて基底細胞癌（再発 morpheiform）と診断した。腫瘍切除し皮弁で再建した。術後補助療法として放射線照射を行った。現在、再発は認めず外来 follow 中である。基底細胞癌は、皮膚がんの中では最も頻度が高く、日頃しばしば遭遇する疾患だが、組織型によっては、慎重な取り扱いが必要である。この症例につき若干の文献的考察を加え報告する。

2. 外来患者におけるトルバプタンの使用経験

循環器内科

橋 元見 向原 直木

平見 良一 藤尾 栄起

湯本 晃久

2010年12月より、心不全に対する新たな利尿薬としてトルバプタンが使用可能となった。トルバプタンはバソプレシンV2-受容体拮抗薬として、従来の利尿剤の作用機序とは異なる点から効果を発揮する。このため、他の利尿剤で効果不十分な心不全による体液貯留に奏功する

ことで注目されている。

発売後3年の経過では、入院患者を中心として使用され、実臨床での適応となる患者や効果が徐々に判明しつつある。また、最近になり、退院後、外来患者に対するトルバプタンの継続使用の報告もみられているが、未だ少数例に止まる。当科でも、心不全患者を中心に外来でトルバプタンの投与を継続し、体液貯留の増悪による再入院が回避可能であった症例を経験する。外来患者に対するトルバプタンの使用経験につき若干の文献的考察を含め、報告する。

3. 当院における虫垂粘液嚢腫17例の検討

外科

渡邊 佑介 西脇 紀之

梶原 義典 岡本 拓也

桂 佑貴 芳野 圭介

下島 礼子 戸田 桂介

遠藤 芳克 信久 徹治

渡邊 貴紀 松本 祐介

渡辺 直樹 甲斐 恭平

佐藤 四三

虫垂粘液嚢腫は虫垂内腔に粘液が貯留し嚢胞状に拡張した状態を示す比較的稀な疾患であり、破裂や粘液の漏出により腹膜偽粘液腫に進展すれば治療に難渋する。2005年1月から2012年3月までに当院で経験した虫垂粘液嚢腫17例について検討を行った。年齢は平均68歳、17例中15例で術前診断が可能であり、術式は近年の4例は腹腔鏡下に施行した。境界型再発症例の1例を除き、16例は無再発生存中である。虫垂粘液嚢腫は破裂し腹膜偽粘液腫として診断されるこ

とも少なくなかったが、近年では画像診断技術の向上もあり術前に診断される機会が多い。また嚢胞破裂のリスクのため腹腔鏡手術は敬遠傾向であったが、近年では技術の向上とともに腹腔鏡手術症例の報告も増加している。良性疾患に対する過大手術を回避し、悪性診断が確定した場合には二期的手術を行うことを見据えたうえでtotal biopsyとして、診断確定及び良性疾患に対する治療を兼ね備えた腹腔鏡下盲腸切除、虫垂切除は、虫垂粘液嚢腫の標準術式になりうると考える。

4. 胸腔鏡下食道切除術に対するリハビリテーション

リハビリテーション技術課

中島 正博	森本 洋史
中野 朋子	皮居 達彦
藤本 智久	西野 陽子
西村 暁子	岡田 祥弥
行山 頌人	岡 智子
大道 克己	大島 良太
浜根 弥恵	田中 正道

当院では食道がんに対して平成22年から内視鏡を用いた手術が始まり、周術期のリハビリテーション介入の件数も年々増加している。

周術期のリハビリテーションの目的は、術後呼吸器合併症の予防や呼吸機能の早期回復、四肢筋力や運動耐容能の改善および嚥下障害へのアプローチを包括的に行うことにより、廃用症候群を予防することである。

手術予定の患者は術前から依頼があり、術後呼吸器合併症の予防を目的とした呼吸訓練および術後リハビリテーションの重要性を十分理解してもらえるようにしている。術後は必要な症例にはICUから介入を開始し、早期から取り組んでいる。また言語聴覚士による嚥下機能評価および訓練の依頼が増え、平成25年度には嚥下機能評価はほぼ全例に行われている。主治医、外科外来、ICU、外科病棟と協力して包括的なリハビリテーションが実施できるようになって

いる。

5. ダヴィンチ手術における臨床工学技士の役割

臨床工学技術課

堀田 雄介	後藤 唯姫
深井 秀幸	田渕 晃成
山中 大幸	三井 友成
松岡 孝志	

当院では、2013年4月に全国で100台目となる手術用ロボット『ダヴィンチsi』を導入し、7月よりロボット支援前立腺全摘手術を開始しました。

今回、ダヴィンチ手術導入までの準備と広報、臨床工学技士の役割についてご紹介いたします。

【準備】

- ・導入委員会への参画
- ・インターネット上でのトレーニング
- ・納入説明会
- ・施設見学：藤田保健衛生大学病院、岡山大学病院
- ・アニマルトレーニング
- ・購入した実機でのトレーニング
- ・手術シミュレーション

【院外（患者）向け広報】

- ・プレスリリース（神戸新聞、毎日新聞掲載）
- ・広報誌：さわやかライフ
- ・病院ホームページ
- ・病院フェスタにて実機実演

【院内（職員）向け広報】

- ・講演会：ダヴィンチsiを用いた前立腺癌手術について
- ・体験コース 設置場所：手術室回復室にて開催
- ・実機トレーニングコースの開催

6. 腎摘を要したAVMの1例

泌尿器科

原 琢人	近藤 有
------	------

松原 重治 小川 隆義

46歳男性。2012年10月に心筋梗塞に対してステント留置を受け抗血小板薬内服中。2013年5月無症候性肉眼的血尿あり、近医受診したが特に異常は指摘されなかった。2013年7月、血尿による腸脱タンポナーデをきたし、当科紹介受診となった。造影CT、および血管造影検査でcirroid typeの動静脈奇形(AVM)を認め、カテーテル塞栓術(TAE)を施行したが、血尿は持続。保存的加療は不可能と考えられ、後腹膜鏡下腎摘除術を施行した。術後経過は良好で、血尿も消失した。

7. 多量腹水貯留と骨盤内腫瘍で紹介され、true-Meigs症候群と診断した1例

産婦人科

柏原 麻子 水谷 靖司
江口 武志 西田 友美
佐藤麻夕子 岡崎 倫子
中山 朋子 小高 晃嗣
赤松 信雄

Meigsらが卵巣線維腫の患者に胸腹水を伴い、腫瘍摘出後胸腹水が消失した症例を報告して以来、卵巣良性腫瘍(線維腫等)によって同様の症状をきたすものをtrue-Meigs症候群としている。今回腹水を伴う骨盤内腫瘍で紹介され、true-Meigs症候群と診断した1例を経験したので報告する。

症例は75歳女性。腹部膨満感と夜間頻尿を主訴に近医内科を受診したところ、多量腹水と子宮体がん疑いで当科紹介となった。エコーでは子宮に1~3cm大の多発筋腫を認め、さらに左頭側には子宮から連続する長径約9cmの充実性腫瘍を認めた。MRIでもT2低信号、造影に乏しい充実性腫瘍で、左卵巣の線維腫か線維莖膜細胞腫が疑われた。腫瘍マーカーはCA125値が458U/mlであった。術式は単純子宮全摘+両側付属器切除とした。腹水3000ml採取、腹水細胞診は陰性であった。卵巣腫瘍の病理結果は莖膜細胞腫であった。術後腹水は消失した。

8. 微小変化型ネフローゼの経過中に併発した膜性ループス腎炎の1例

臨床研修部

中田 有紀
内科 山中龍太郎 廣政 敏
香川 英俊 上坂 好一

【症例】32歳、女性

【主訴】尿量低下、浮腫

【現病歴】他院で2005年に微小変化型ネフローゼ(MCNS)を発症し、2回再燃、ステロイド維持治療を受けていた。当院は2008年に初診である。2011年8月に出産、2012年冬よりレイノー現象が出現、2013年3月に抗核抗体×2560、5月に抗ds-DNA・RNP・SS-A抗体陽性、低補体血症を指摘されたが、腎炎寛解で他の臓器障害も認めなかった。6月に蛋白尿2+、7月に尿量低下、浮腫で入院した。蛋白尿18g/日に対し血尿は乏しく、MCNSを主体とするループス腎炎の併存を疑った。高用量ステロイド療法を開始するも高度蛋白尿は1ヶ月以上遷延した。FSGSを疑い、シクロスポリン併用、LDLアフェレーシス施行した。抗ds-DNA抗体、補体は正常化し、9月末に退院、11月時点で蛋白尿2.4g/日であった。退院前に施行の腎生検は、後日、膜性ループス腎炎の診断であった。

【考察】MCNSの診断8年後に発症したループス腎炎を経験した。出産や維持ステロイド減量を契機に、SLEを発症したと考えられた。発症様式と治療反応性が非典型的であったため、鑑別診断にも治療にも難渋した。

9. 第1腰椎椎体および硬膜外腫瘍の1例

整形外科 橋本 国彦 青木 康彰
山岸 亮 村田 洋一
池上 大督 野村 幸嗣
松岡 孝志 阪上 彰彦
田中 正道

【目的】硬膜外に発生した間葉系軟骨肉腫の1例を経験したので報告する。

【症例】37歳 女性。2013年2月頃から腰痛と右坐骨神経痛が出現。近医受診し、レントゲンでは異常なく、内服加療開始となった。その後も症状改善しないためMRI撮影したところ、第1腰椎に異常所見を認めため、精査加療目的で当科紹介受診となった。MRIでは第1腰椎椎体から硬膜外に広がる腫瘍を認めた。手術は硬膜外腫瘍切除と後方固定術を行い、術後疼痛は改善した。病理組織診断は間葉系軟骨肉腫であった。術後のMRIで腫瘍の再発を認めたため、再手術（TES:total en bloc spondylectomy）を行った。再手術後にRTを行い、現在再発は認めていない。

【考察】間葉系軟骨肉腫は手術治療が標準であり、化学療法、放射線療法の有効性は明らかになっていない。また、再発・転移が多く今後も経過観察が必要と考えられる。

10. 術中のロピオン投与後にアナフィラキシー様症状を起こした2例

麻酔科

村上 幸一	大森 睦子
倉迫 敏明	仁熊 敬枝
八井田 豊	仙田 正博
山岡 正和	稲井舞夕子
上川 竜生	西海 智子
古島 夏奈	吹田 晃享

当院では手術症例ほぼ全例に、術後疼痛緩和・シバリング予防にロピオンの投与を行っている。ロピオン投与によると考えられるアナフィラキシー様症状を2例経験したため報告する。

＜症例1＞40歳代男性、全身麻酔下に腹腔鏡下胆嚢摘出術を行った。手術終了前にロピオンを投与し、術後30分で著明な右眼瞼浮腫と軽度の呼吸困難感が出現した。浮腫は抗ヒスタミン薬投与後に軽快した。術前問診ではアレルギー歴なしだったが、術後聴取にてバファリン内服後に呼吸困難を伴う顔面浮腫が出現したと判明。

＜症例2＞60歳代女性、全身麻酔下に腹腔鏡下胆嚢摘出術を行った。手術終了前にロピオンを投与し、急速なSpO₂・血圧低下、頻脈を認めた。昇圧剤への反応は乏しく、抗ヒスタミン薬投与後にバイタルは徐々に改善し、挿管のままICU入室とした。咳喘息の既往があったが、他アレルギー歴はなかった。1ヶ月前に全身麻酔歴があり、同じ薬剤を使用していたが問題なかった。

11. 失明をきたした胃癌の視神経転移を疑う一例

眼科	土居真一郎	清水 敏成
	塚本 真啓	松井 朋美
	杉原 靖章	玉田沙弥香

【緒言】癌の眼内転移は脈絡膜をはじめとするぶどう膜に発生することが多く、視神経のみに単独転移する事は極めて稀である。霧視を初症状とし、胃癌の視神経転移を疑う一例を経験したので報告する。

【症例まとめ】64歳女性。左眼霧視を主訴に当科受診。2ヶ月前に胃癌の手術切除を行い、術後にTS-1を内服中であった。左眼の初診時矯正視力は1.0であったが、徐々に低下を認めた。白内障手術を行い、診断的治療としてステロイドパルス療法を行ったが改善はなく、その2ヶ月後に視力は光覚まで低下した。造影MRIで左視神経腫瘍を認め、胃癌の転移性腫瘍としてTS-1/CDDPによる化学療法を開始した。腫瘍増大を認めないまま現在も経過観察中である。

【考察】進行性の乳頭腫脹をみた場合、胃癌の転移性腫瘍も念頭におく必要がある。

12. 外来における内服抗がん剤服薬指導の取り組み

薬剤部	島田 健	大里 勇二
	福山 正人	喜多 良昭

上坂 好一

【目的】

抗がん剤治療において、患者教育は非常に重要である。しかし、外来で処方される内服抗がん剤についての説明は医師と院外薬局に一任しているのが現状であった。そこで、外来での内服抗がん剤導入時に病院薬剤師による指導を試みた。その現状と課題について報告する。

【方法】

外科で新たに内服抗がん剤を導入する際に薬剤部に連絡。薬剤師による服薬指導を行った。

【結果】

平成24年5月～平成25年4月で延べ140件の指導を行った。癌種では胃がんが多く次いで大腸がんが多かった。指導薬剤では経口フッ化ピリミジン製剤が多数を占めていた。

薬剤師の指導について、外来スタッフにアンケート調査を行ったところ、薬剤師の介入について、高い評価を受けた。患者指導医師の抗がん剤についての説明時間の短縮につながるという声もあった。

腎機能低下を認める患者においては薬剤の減量を、ワルファリンやフェニトインといったフッ化ピリミジン系薬剤と相互作用のある薬剤を服用中の患者においては採血確認を含めた注意深い経過観察を医師に提案することがあった。

【考察】

薬剤師の外来における服薬指導は、スタッフからの評価も高く、外来診療で一定の役割は果たしていると考えられる。ただし、コンプライアンスや副作用の回避といった客観的な貢献に関しては、評価ができていない。また、慢性的なマンパワー不足という問題もある。今後は薬薬連携などを強めていくことで、院内のマンパワー不足を補うとともに、最終的には治療成績の向上につながるような指導を行っていくことが最大の課題である。

13. 赤十字看護専門学校学生本社研修を終えて
姫路赤十字看護専門学校2年

梅崎吉保子 加藤 弓夏
寶 羽純 岩崎 亜美

私たちは赤十字看護専門学校の2年生を対象に毎年行われる本社研修に参加した。研修の目的は、赤十字の組織・事業等の理解を深めると共に、学生同士の交流を通して、赤十字の一員としての自己を育むことである。

本校に入学し、講義や臨地実習、ボランティア活動を通して、赤十字について考える機会が多くあった。また研修を受けるにあたっては、「赤十字らしさってなんだろう～私たちの考える赤十字らしさとは～」をテーマに自分たちが考える赤十字らしさや赤十字看護師の特徴や役割などについて、何度も意見交換を行った。

その結果、優しさや思いやりなどの「見えない想いが見えるカタチに」変えることこそが私たちの考える赤十字らしさであると考え発表した。同じ研修に参加した全国の赤十字看護学生の発表を聴き、赤十字に関してより理解が深まったことや学びをここに報告する。

14. 基礎看護学実習Ⅰ - 1・2・3の取り組み
と学生の学び

看護専門学校

中島 啓子 西谷 由子
内海 尚美 中林 朝香
井上 恵実 名村かよみ
藤後 栄一 藤元由起子
藤田美佐子 松井 里美
山田 道代 柳 めぐみ

姫路赤十字看護専門学校は、体験から学ぶ経験型実習を基盤とし、学生の体験を大切にされた教育実践をしている。また、状況的学習論の考え方により、実践共同体への参加から「看護を学ぶ」ために、入学して間もない4月から基礎看護学実習を取り入れている。

4月には、私服で患者さんのすぐそばで過ごし、5月は院内をくまなく探索し、6月には看

護師と一緒に行動する。看護の知識もほとんではない学生にとっては、戸惑いや不安も大きい。しかし、このような状況を理解して、病院のスタッフや患者さんから実習中暖かく見守られたことは、学生には大きな支えとなったようで、感謝の気持ちを口にする学生も多かった。また、看護職に魅力を感じ、専門的知識・技術はもちろんのこと、様々な経験から豊かな人間性を形成することの必要性を認識し、これらが学習意欲へとつながっていくと感じている。

そこで、今回は基礎看護学実習 I - 1・2・3での取り組みと学生の学びを紹介する。

15. ロドデノール含有化粧品使用後に生じた化学的白斑（ロドデノール誘発性脱色素斑 Rhododenol induced-leukoderma）

皮膚科 山田 琢

塩見真理子（岡山大学皮膚科）

昨年の本会において、我々はカネボウ美白化粧品を使用中に尋常性白斑様の色素脱失を来した2症例の報告を行った。その後、病理学的検索等に加え、2013年1月19日の第258回日本皮膚科学会岡山地方会で追加報告を行ったが当時は会場の多数の皮膚科専門医の中で同様の症例の経験者は皆無であった。その後、同門の他施設から数例の報告が集積され、岡大皮膚科関係者とカネボウとの交渉の末に2013年7月4日に、全商品の回収の報道発表に至った。報道発表後に当科を受診された症例も含め、文献的考察も加えて報告した。

16. 当科における頸部リンパ節結核の診断についての検討

耳鼻咽喉科

松山 祐子 橘 智靖

小河原悠哉 阿部 郁

頸部リンパ節結核の診断について、穿刺吸引法（fine-needle aspiration：FNA）による細胞診、塗抹、抗酸菌培養、及び Polymerase Chain Reaction（PCR）検査の有用性が報告されてい

る。頸部リンパ節結核の切除生検は術後に難治性皮膚ろう孔の形成の危険性があり、低侵襲であるFNAによる診断が望ましい。2000年から2013年に当科を受診した頸部リンパ節結核22例について、FNAで診断が可能であった14例と切除生検を必要とした8例で、血液検査や超音波所見について比較検討した。その結果、FNAでリンパ節結核の診断が困難な例は、血液検査で白血球数やCRPの上昇がない症例、超音波検査所見でリンパ節癒合や膿瘍形成を認めない症例だった。FNAで診断困難な場合、必要時には生検を考慮すべきと考えた。

17. 小児の胃GIST（Gastrointestinal stromal tumor）の1例

小児外科 中谷 太一 畠山 理

岡本 光正

症例は9歳女児、当院受診5か月前より近医にて貧血に対して内服加療を繰り返されていた。受診日前日より体調不良・腹痛あり、近医再受診しHb 4.3g/dlと著明な貧血を認めたため、当院受診・入院加療となった。精査の結果、胃角部後壁の粘膜下腫瘍（GIST疑い）と診断し、腹腔鏡・内視鏡合同胃局所切除術（laparoscopic and endoscopic cooperative surgery：LECS）を試みるも、施行困難にて腹腔鏡補助下胃部分切除術を施行、術後経過良好にて術後9日目に退院となった。病理診断にて胃GISTと診断された。

GIST好発年齢は50-60歳代であり、小児での発症は稀である。また、近年胃粘膜下腫瘍に対して胃壁の過剰切除を避ける目的でLECSが開発されたが、依然小児の施行例は極少数である。今回我々はLECSを試みた小児の胃GISTの1例を経験したので報告する。

18. 良性乳児発作35例の検討

小児科 佐竹恵理子 稲熊 洋祐

城田 佑子 松本 真明

宮内 寛子 金 聖泰

濱田 佳奈 坊 亮輔

向井 祥代 井上 道雄
 大西 徳子 藤原 安曇
 上村 裕保 高見 勇一
 柄川 剛 高橋 宏暢
 濱平 陽史 五百蔵智明
 久呉 真章

良性乳児発作（以下BIS）は乳児期に無熱性けいれん、複雑部分発作で発症する年齢依存性の予後良好なてんかんとされる。しかし確定診断には長期的な発作予後、発達予後が良好であることを確認する必要がある。今回、生後1～12ヶ月に無熱性けいれんを主訴に当科を2009年1月～2012年12月に受診しBIS疑い、フォローし得た35症例について検討した。初回発作は平均6.3カ月で多くが複雑部分発作、全身強直間代性痙攣で発症していた。最終発作は平均7.5ヶ月、内服治療期間は平均14.3ヶ月、最終受診時の年齢は平均2.7歳であった。てんかん発症8例、言語遅滞、精神発達遅滞、自閉症をそれぞれ1例ずつに認めた。発症当初はBIS疑いと診断しても後にてんかんや精神遅滞が明らかになることもあり、多数が最終発作1歳未満で長期内服は要しないとされているが、内服中止後の発作再発、発達予後も含め慎重で長期的なフォローが必要と考えられた。

19. 当院における周術期口腔機能管理への介入 歯科口腔外科

谷澤由紀子 北村 里織
 片岡 聡子 小林 理恵
 谷 泰子 藤原 成祥
 釜本 宗史 出原 絵里
 小川 雄右 花田 泰明
 福村 元洋

口腔合併症のうち心臓弁膜症における人工弁置換術、整形外科インプラント手術などの術後の感染性合併症は以前より危惧されており、全身疾患の周術期における口腔機能管理の重要性は各科で提唱されてきた。更には2012年4月診療報酬改定で、がん患者の口腔を守るための連

携が、「周術期口腔機能管理」という保険診療上の項目で評価されるようになった。合併症の予防を促すことによって在院日数の短縮やQOLの向上を期待され社会的にも注目されている。

当科でも本年4月より積極的にこれに注目し活動を行ってきた。外来では地域のかかりつけ歯科医院との連携体制の整備と各科外来への喚起。病棟では歯科医師、歯科衛生士、看護師で構成されたOMT: Oral Management Teamでの入院患者への介入。今回、当院での周術期口腔機能管理における活動の一端を発表する。

20. 平成25年度嗜好調査について

栄養課 穂刈 直樹 中谷 友絵
 宇多 友里 芝山 伸男
 塚本 瑛子 芝口かおる
 早瀬 寛子 笹野 優子
 大西 勝彦

医療技術部長

松岡 孝志

栄養課では、平成24年8月から患者様の食事満足度アップを目指し、大幅な献立の改訂、選択メニューの充実、調理技術スキルアップ講習、盛付けの工夫、食器の選択などを行ってきた。

平成25年度の嗜好調査では、平成24年度と比較し患者満足度の上昇がみられたのでその結果を報告する。

21. 両側巨大副腎髄脂肪腫の一例

放射線科

富田 晃司

副腎性器症候群を基礎疾患にもつ両側副腎巨大骨髄脂肪腫の一例を経験したので文献的考察を加えて報告する。

症例は32歳女性。腹部膨満感でCTを撮影され、両側後腹膜腫瘍を認めたため精査目的で紹介された。既往として先天性副腎皮質過形成の加療歴がある。CTでは左に29cm、右に19cmの腫瘍を認めた。内部は脂肪濃度主体で濃淡があ

り、造影効果を有する索状構造が混在していた。腫瘍は腎の頭側に位置し、腹腔内臓器を圧排していた。正常副腎は同定できず、左側の腫瘍に左副腎静脈を疑う構造があり副腎由来と考えられた。両側の骨髓脂肪腫を疑ったが、巨大腫瘍で症状を伴う事から腫瘍摘出術が行われた。

摘出標本は成熟脂肪細胞の増殖を示す腫瘍で造血組織も内部に散見された。正常副腎組織は辺縁に散在するのみであった。骨髓脂肪腫と最終診断された。副腎の骨髓脂肪腫は副腎腫瘍全体の3～5%と比較的稀で、両側病変は症例報告が散見される程度である。

22. 当院におけるAi (Autopsy imaging) の現状

〔各施設のアンケート結果を踏まえて〕

放射線技術部

辻井 貴雄 岩見 守人
大塚 義修 天川 善晃
中島 敏博

Ai (Autopsy imaging) は『死亡時画像診断』のことで、死亡後にCTやMRIを撮像し死因を究明する方法である。昨年6月に死因究明関連2法案が成立し、本年4月より『警察関連死因法』が施行された。これに伴い全国的にAiの問い合わせが増加している。赤十字関連施設においては、旭川赤十字病院がA認定、横浜市立みなと赤十字病院がB認定を取得しており、認定施設は今後さらに増加していくと予想される。

当院においては、2008年に倫理委員会の承認を得てから主治医・救急医の判断によりモダリティをCTに限定して実施することとなり、現在までに45件実施した。その大半はCPAOA(来院時心肺停止)であり、院内治療中患者の急変後にも実施している。Aiについては数多くの問題点が存在し、当院でも運用に苦慮している。

今回は近畿の赤十字病院13施設に実施したアンケート結果と、当院のAiの現状と問題点および当科で作成したマニュアル(案)について

報告する。

23. 採血待ち時間短縮と採血患者への安全性向上の取り組み

検査技術部 輸血課 中央採血室

松井 隆 牛丸 牧子
杉山 絵美 大谷 尚子
大橋 裕子 船江 博幸
山本 繁秀

看護部 寺脇真寿美 藤原 あや
牧 喜子

当院外来患者数1日平均1200名のうち、生体検査、検体検査合わせて約1/3の人数が検査受付を訪れ、構造的にも混み合う状況である。その中で中央採血室は、多い日には400名以上の採血を4名で行い、受付から採血までの待ち時間が30分から40分かかり、長時間の待ち時間に対するクレームや、苛立ちによるトラブルがよく発生していた。

また、採血中の気分不良による椅子からのすべり落ち事故も発生しており、安全対策の対応を迫られていた。

採血担当者側も採血に追われ、息つく暇もない状態で採血を急ぐあまり、採血ミス(採り直し)にもつながっていた。

今回、採血待ち時間の短縮と患者の安全性確保を目的とした採血室のレイアウト変更、採血担当者数の見直し、使用物品の変更等を行い、一定の成果を得たので報告する。

24. 出来事発見報告 (CLIP) からの現状分析

ードレーン・チューブ類の管理に関する報告より—
医療安全推進室

濱田 和代 上坂 好一
最所 裕司 五百蔵智明
喜多 良昭 山本 繁秀
小林 里美 福島五穂美
黒田 尚美 坂本佳代子

2012年12月1日から2013年11月30日の一年間の全報告件数は1988件であった。そのうち、報

告レベル3b以上の件数は78件であった。ドレイン・チューブ類の管理（ライン管理含む）の報告レベル3b以上の報告は30件で、38.5%を占める。ドレイン・チューブ類の管理上の報告では、自己抜去の報告が多くを占めるが、その背後要因としては系統的に改善が可能な要素がいくつか含まれている。そこで、ドレイン・チューブ類の管理に関する報告から要因を検討し、予防対策の強化を図ったので報告する。